

4 4 歳男性

前半戦が始まるなりフルスロットルで盛り上がったのに比べ、後半戦は、初日の前半は心配な感じでスタートしたのですが、初日の後半にはすでに行けそうな気配が。木戸さんもおっしゃっていましたが、スタート時からの高低差でいえば、後半戦がワークショップごとにぐんぐん上がっていく感じは、前半戦以上のスリルでした。でもそれも、あとから思えばそうだとということで、前半戦にしても、後半戦にしても、最後の最後まで不安と期待がぐちゃぐちゃにないませですよ。

後半戦は、「関係性」がテーマということで、各参加者が、自分一人ではなく他のメンバーも使って、複数の人間で舞台を作っていくというハードな課題。メンバーは、自分の劇の演出家として（これは木戸さんと共同、ということになりますが、準備する段階では自分一人での作業）設定や仕掛け、他のメンバーに何をやらせるかまで考え、主演俳優としてどう演じていくかに心も体も緊張し、その上、他のメンバーの脇役として頑張らなくてはならないという、複数の大きな仕事を抱えながら、やり遂げて行きました。この、複数のことを、すべて全力でやりきったという自信は、なかなか得られないものです。

終わった後も、なかなか終わったような気持ちになりませんでした。これは、前半戦の時、終わった翌日、心にぼっかり穴が開いたようになり、反動でとても心が揺らいだ、それとは全く違いました。

東京へ戻って何日も経った今でもまだ、愚放塾での生活と繋がりが残った感覚です。参加者のみんなはどう過ごしているだろう。これは前半戦含めですが、すっかり家族のような気分です。再会できるのが楽しみです。そして、またこうした短期プログラムがやれたらなあと思います。今回（後半戦）はたまたま、最終日が、地元のお祭りの日で、解散後、神社に行って相撲の奉納を見たりしました。今度は、農村歌舞伎の上演日などに最終日を合わせて企画するのもいいなあと思いました。